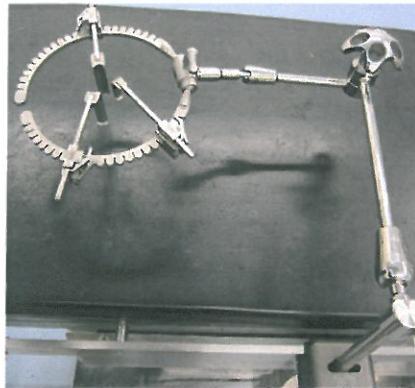


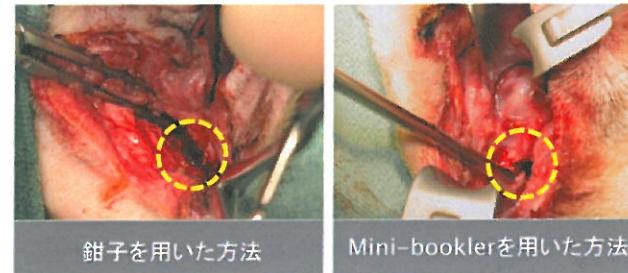
40年以上世界中の手術室で活躍中。一般外科・小児・泌尿器……進化し続ける互換性のある幅広い商品ライン。

2012年、獣医師業界での症例発表、世界初。東京農工大学で活躍中のセット概要を紹介。

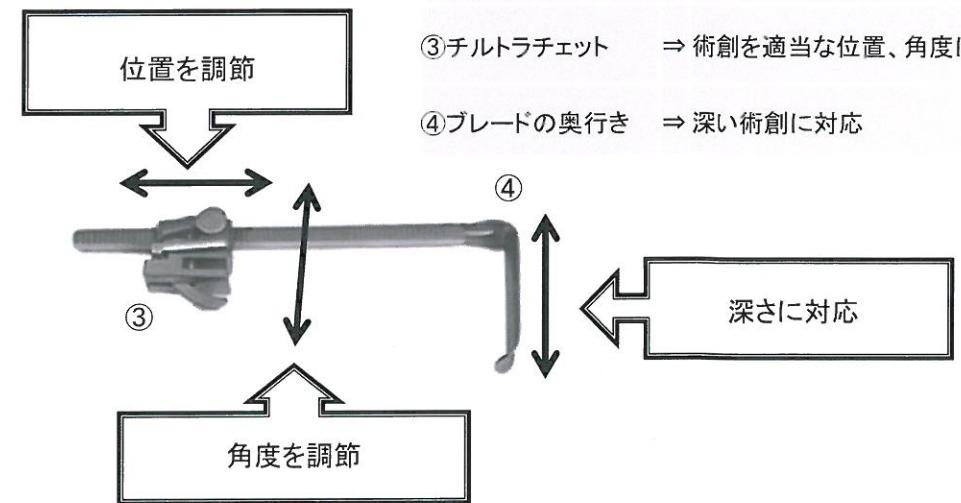
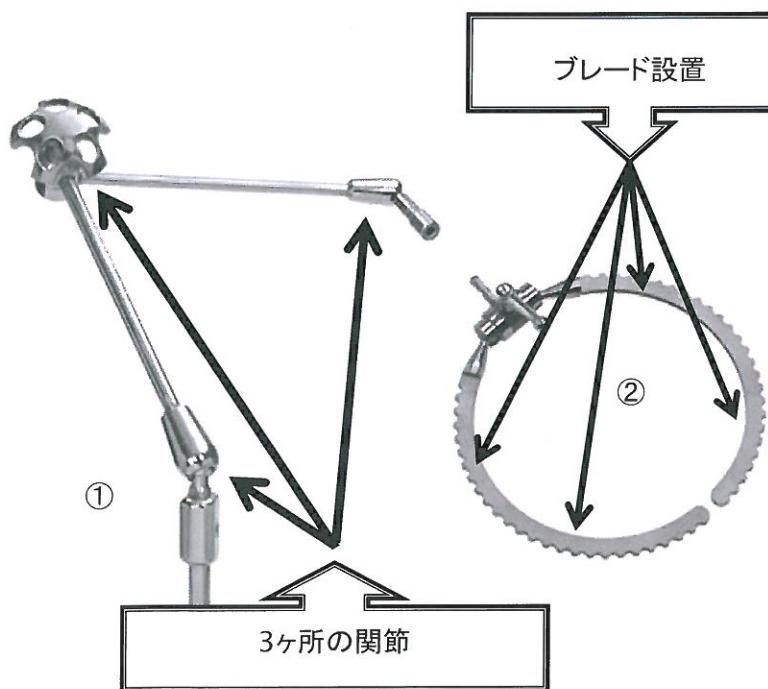
税別価格¥1.230.000-



比較



- ・視野が良好かどうか
- ・視野の安定性はどうか
- ・助手の手を必要とするかどうか



犬の全耳道切除術において テーブルマウント式リトラクターシステム Mini-booklerを用いて術野確保を試みた2例

加地英樹 福島隆治 鈴木周二 浜部理奈 金修敏
Derya Aytemiz 吉行里依子 許懷哲 深山俊治 田中綾
東京農工大学獣医外科学研究室

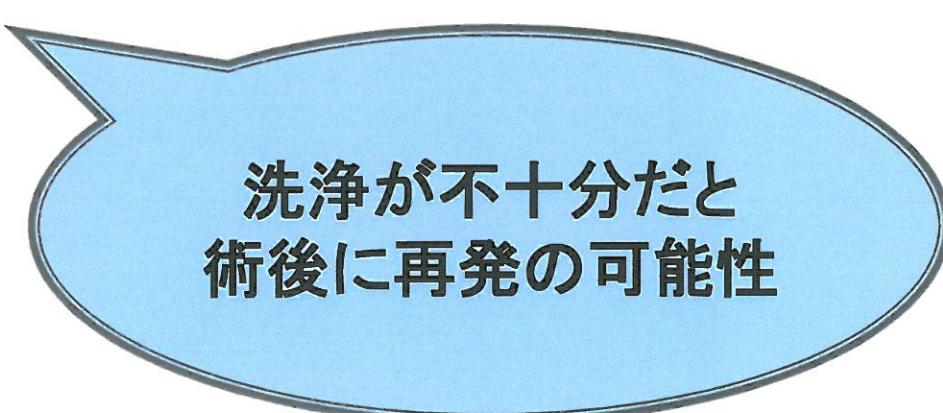
はじめに

- 適切な内科的治療に反応しない慢性外耳炎の動物や、耳介軟骨が重度に石灰化または骨化している症例

⇒全耳道切除術

また、鼓室胞内の洗浄、浸出物の除去

⇒外側鼓室胞骨切り術



洗浄が不十分だと
術後に再発の可能性

はじめに

- 術後の炎症の再発を防ぐため
⇒ 鼓室胞内の十分な洗浄



術創が狭く深いため
十分な洗浄が困難



術野の確保の方法が重要

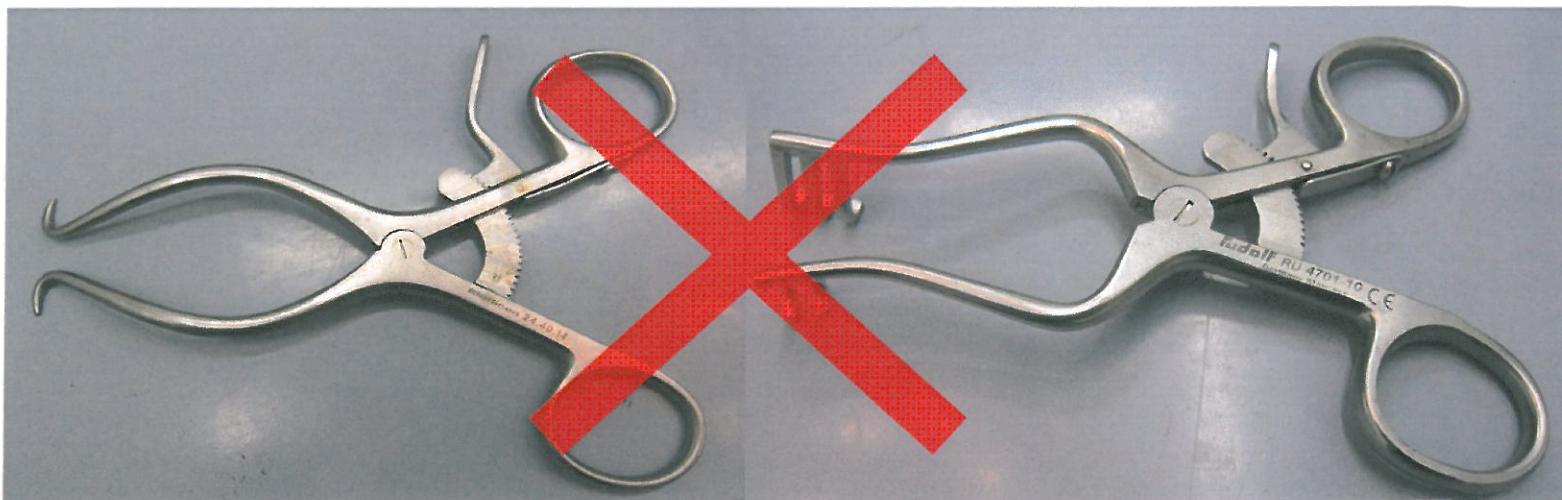


はじめに

- ゲルピーやウェイトラナーなどの開創器
⇒深い部位まで開くことができない



耳道のオペには不向き

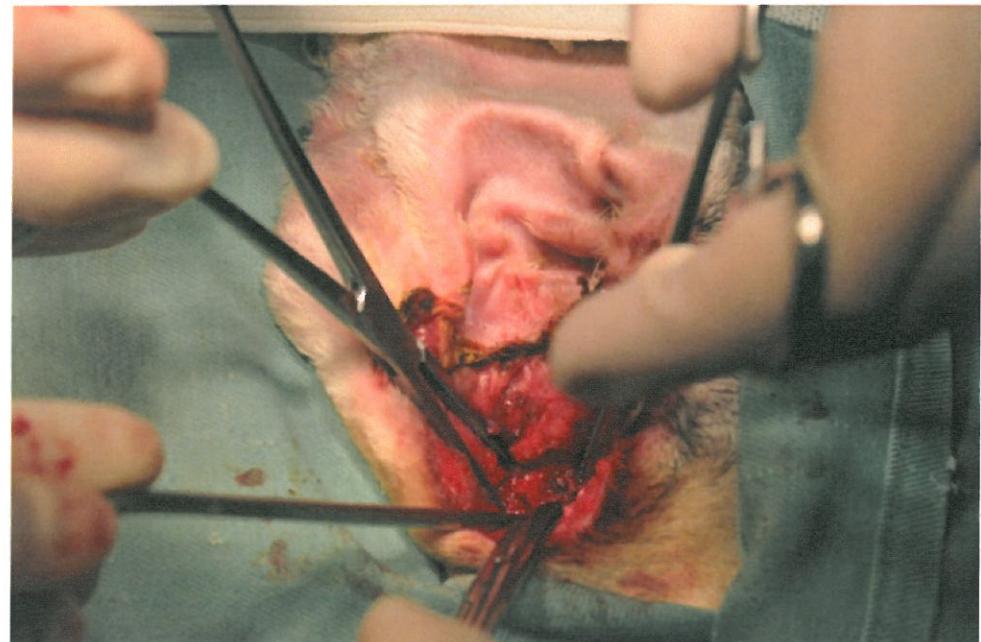


従来の方法

- 助手が鉗子を用いて術野を確保

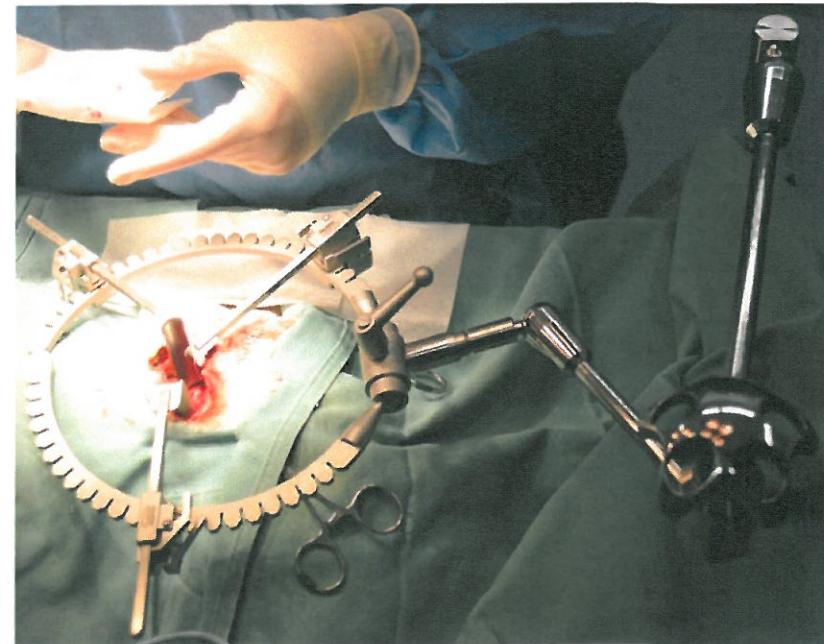
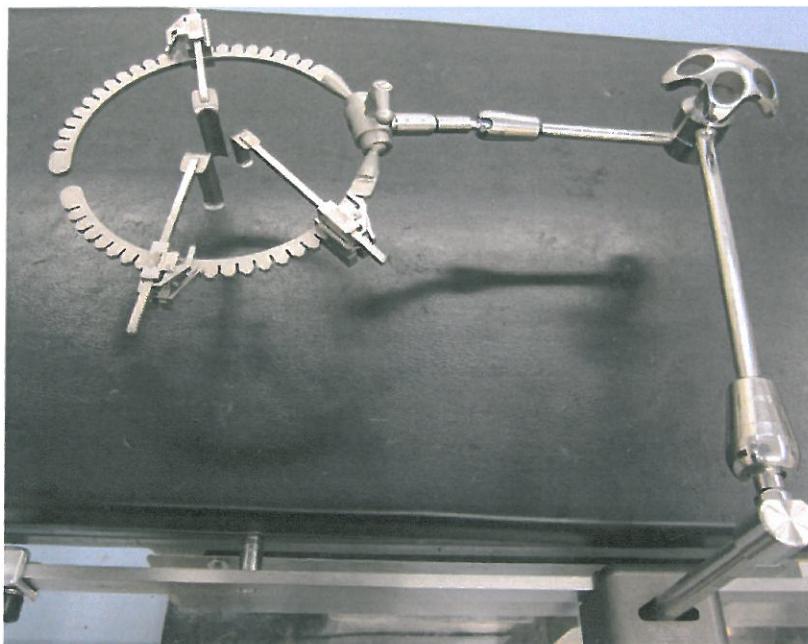
<問題点>

- ・術野の確保が不十分
- ・術野が安定しない
- ・助手の両手を必要とする



今回使用した開創器

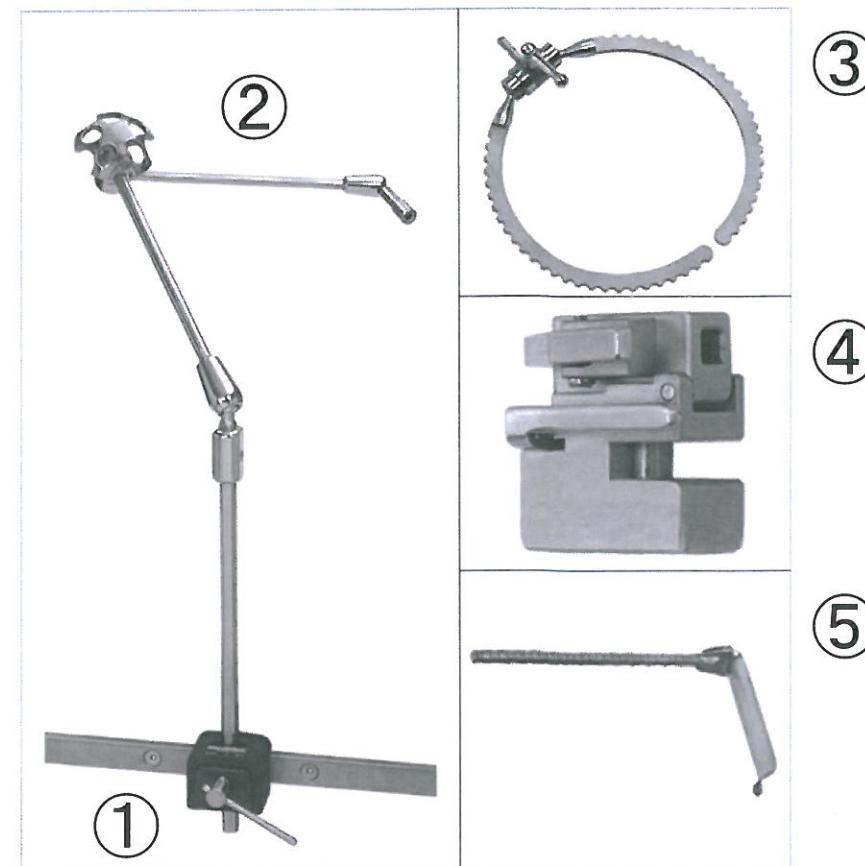
➤ テーブルマウント式リトラクターシステム
(Mini-bookler , Mediflex®)



今回使用した開創器

➤テーブルマウント式リトラクターシステム
(Mini-bookler , Mediflex®)

- ①ストロングアームホルダー
- ②ポジショナー
- ③スプリットリング
- ④チルトラチェット
- ⑤ブレード

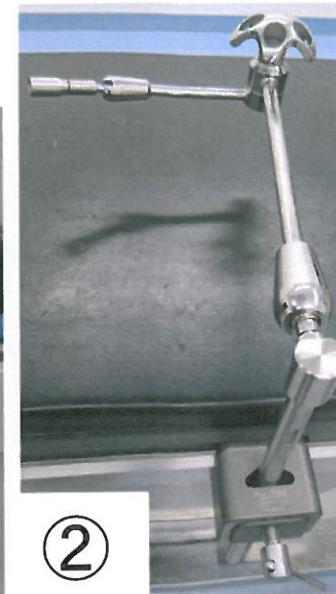


組み立て方

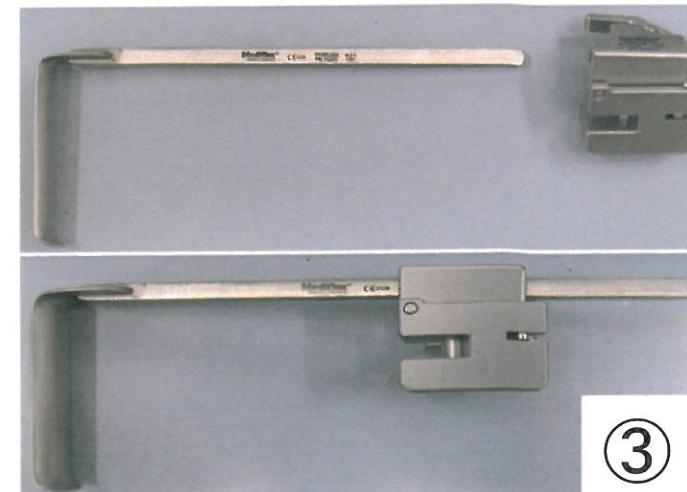
①ポジショナーをストロングアーム
ホルダーに固定



②ポジショナーを適当な位置で固定

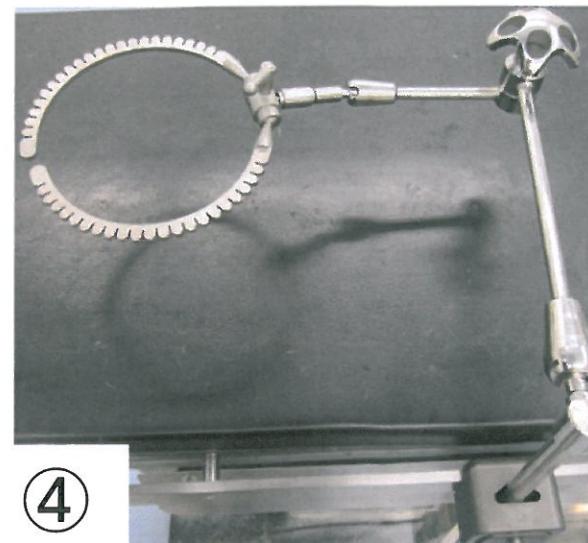


③チルトラチエットをブレードに装着



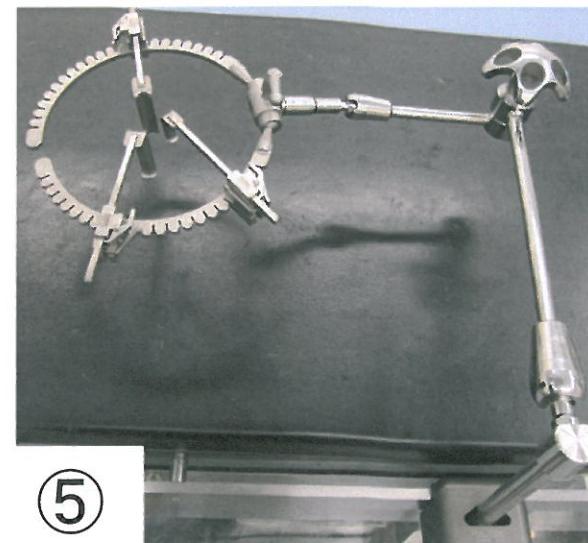
組み立て方

- ④ポジショナーの先端にスプリットリングを設置



④

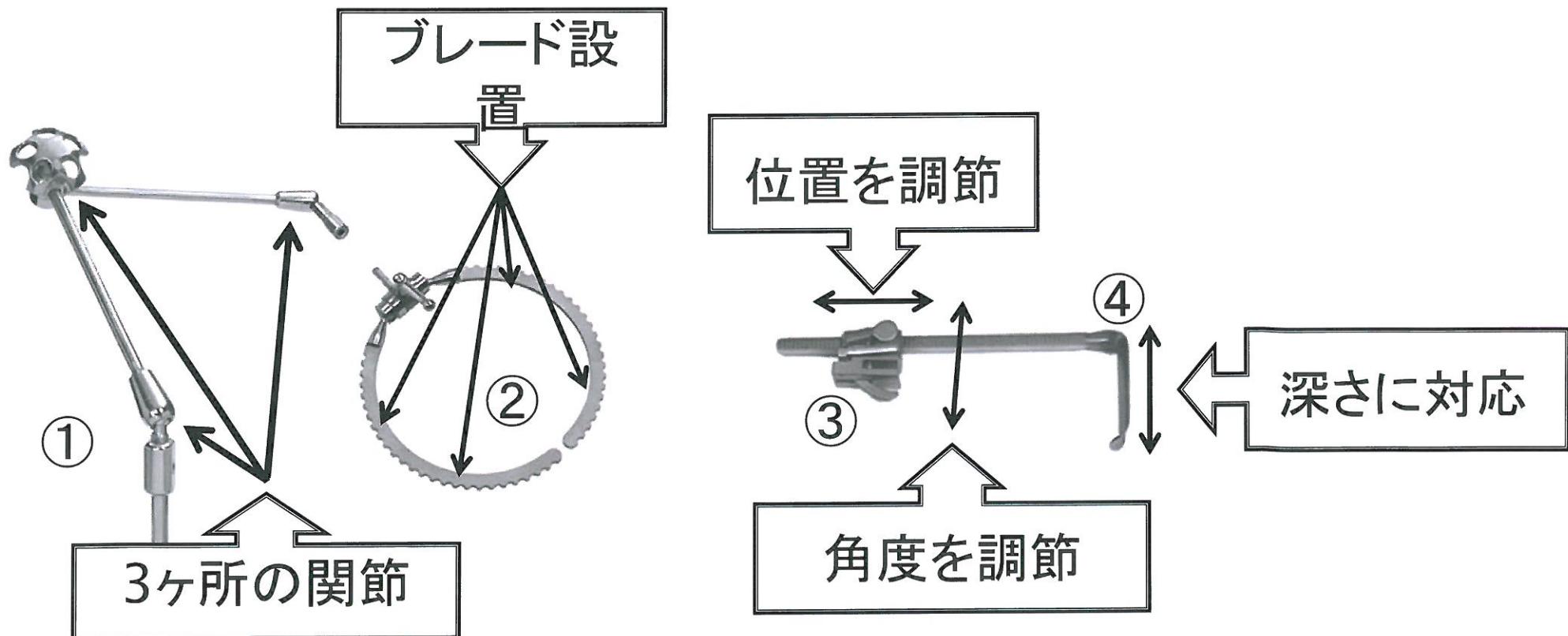
- ⑤チルトラチェットを装着したブレードを、スプリットリングの適当な場所に設置



⑤

利点

- | | |
|------------|------------------|
| ①ポジショナーの関節 | ⇒ 適当な位置で固定 |
| ②ブレードの位置、数 | ⇒ 術創を多方向に開く |
| ③チルトラチエット | ⇒ 術創を適当な位置、角度に牽引 |
| ④ブレードの奥行き | ⇒ 深い術創に対応 |



症例

	症例①	症例②
犬種	ジャーマン・シェパード	アメリカン・コッカー・スパニエル
性別	雄	雄
年齢	3歳	11歳
体重	34.2kg	13.5kg

・ともに他院にて1年から2年程内科的治療
⇒改善が乏しいため外科的処置を希望し来院

各種検査

症例①

触診	左右とも耳道全体の硬結感	左右とも耳道全体の硬結感
オトスコープ	左右とも膿性耳垢確認 左右とも鼓膜なし	実施せず
CT 検査	耳道 左右とも重度狭窄 水平耳道内に腫瘍	左右とも重度狭窄 水平耳道内に腫瘍
	鼓室胞 右耳のみ炎症あり	左右とも炎症あり

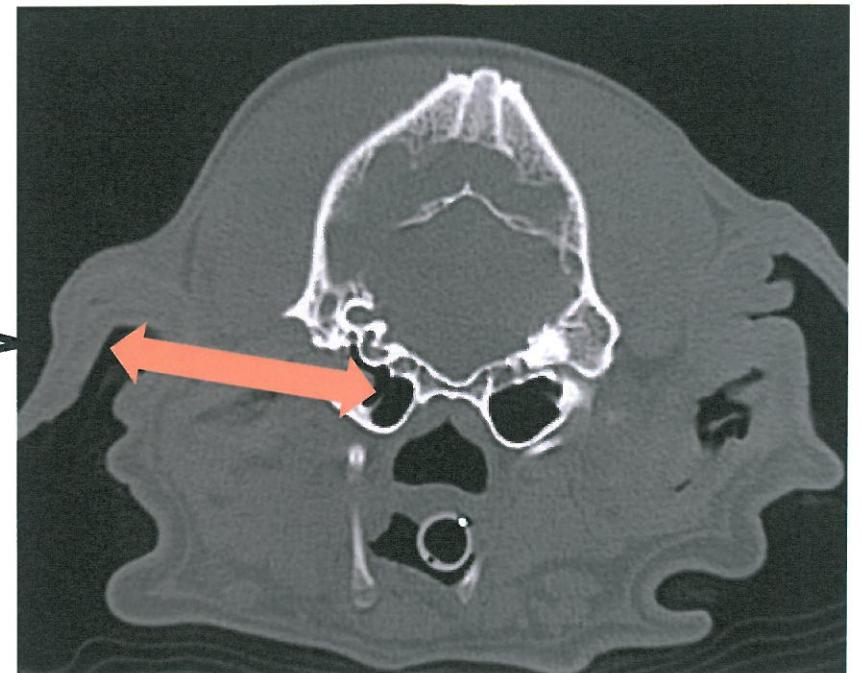


症例

	症例①	症例②
術式	<u>右耳全耳道切除術および外側鼓室胞骨切り術</u>	<u>両耳全耳道切除術および外側鼓室胞骨切り術</u>
鼓室胞までの距離	右: 約49mm	右: 約40mm、左: 約43mm

視野を確保するためには
この深さを持った開創器が必
要

※今回50mmの深さを持った
ブレードを使用



術中

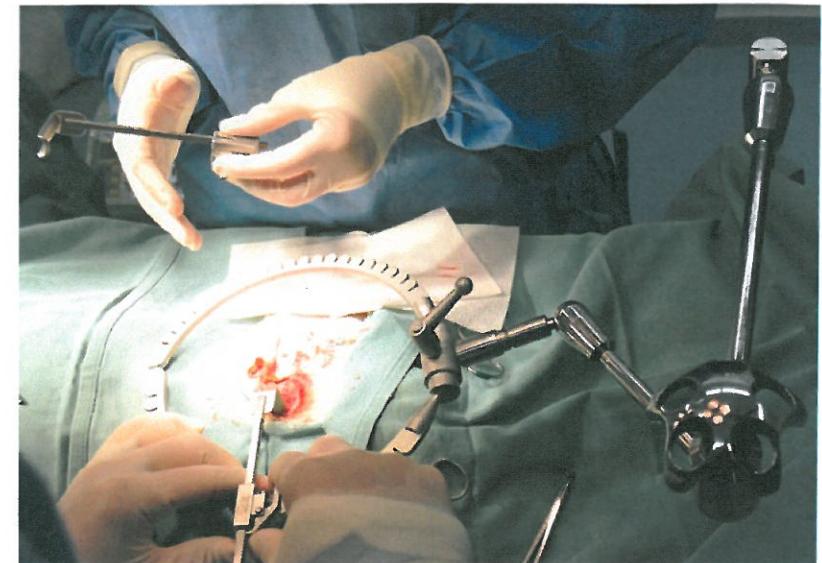
水平耳道の外耳道付着部で耳道を切除



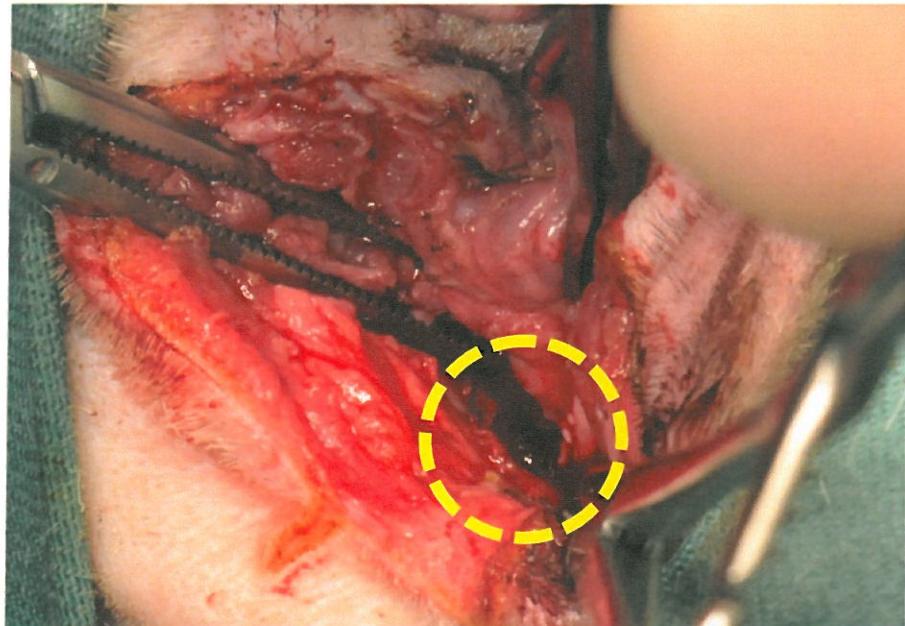
Mini-bookler開創器設置



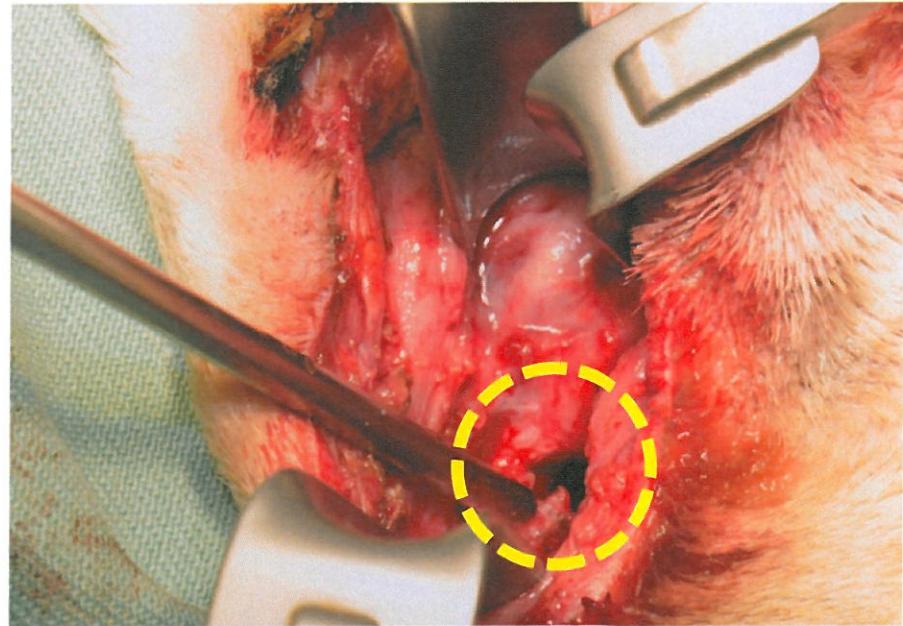
術野を適切に確保後、鼓室胞内の洗浄



比較



鉗子を用いた方法



Mini-booklerを用いた方法

- ・視野が良好かどうか
- ・視野の安定性はどうか
- ・助手の手を必要とするかどうか

考察

➤ 従来の方法における問題点

〔 視野が不十分
視野が不安定
助手の手が奪われる 〕 → 解決！！

➤ 今回、中型犬と大型犬で使用

⇒どちらにおいても問題なく使用可能だった

➤ 今回使ったもの以外にも大小様々なブレード

⇒小型犬や猫、または腹部のオペなどにも応用が考えられる

